OUMC

大阪大学山岳会 会報
No.8
2006年6月
発　行　大阪大学山岳会
〒565－0871 吹田市山田丘２－１
大阪大学大学院工学研究科
地球総合工学専攻 大野研究室内
ＴＥＬ０６－６８７９－７６３５
ＦＡＸ０６－６８７９－７６３７

ある報告

西川　元夫

私どもは１９５６年（昭和31年）に黒部川下ノ廊下を鳴沢出合で積雪期初横断、59年にはスゴ沢出合で上ノ廊下の積雪期初横断に成功し、翌60年には有峰を経て薬師岳頂上付近でキャンプをして薬師岳東面のルート開拓を行いつつ上ノ廊下まで降りるなど、積雪期の黒部にこだわり、自然風土に密着した山行で私どもなりの成果を残してきた。一般の登山家からは変則的な登山と見られていたが、私どもは、これらを「下向きの登山」と称して成果を積み上げていった。

当時は、今の大衆登山時代と比較すると、山へ行く人ははるかに少なく、なかでも黒部に入る人は極めてまれな時代であった。一方、黒部川の水量は今と比べて圧倒的に多く、近づくのに恐ろしさを感ずるほどであった。それが64年の黒部ダム完成で大町ルートが開通することで情勢が大きく変わり、特に黒部別山大タテガビンや黒部丸山、奥鐘山などの大岩壁とか黒部川側壁への登攀者が急増した。その後、それらの岩壁、岩稜、岩溝の第一級の主要ルートは早々と登攀されてしまい、今や積雪期の初登とか単独初登を狙った、より困難な挑戦も詰めの段階に達してしまった。

さらには一岩壁の登攀にとどまらず、例えば奥鐘山西壁を登り、後立山を縦走し、黒部川を横断して丸山東壁を登るとか、天狗尾根から鹿島槍へ上がり、後立山を縦走、黒部川を横断し、黒部別山南尾根、ハシゴ段乗越から剱へ入り、八ツ峰を登って早月尾根を下るといった積雪期の複合登山が続々と行われている現状を知った。これには登攀技術の高度化と合わせ、携行する装備類や食料等の改良が進んだり、新品目が加わったりした効果も無視できないと思うが、50年前、私どもが黒部を楽しんでいた頃とは隔世の感を禁じえない。

こうした動きに参加した登山家の多くは、広く世界の山々を経験している社会人山岳会や大学ＯＢの第一級登山家であり、頂きに森を持った極めて日本的な黒部の大岩壁群を、彼らはアルプスやヒマラヤ、ヨセミテの岩壁と同列に評価していることも知り、大層好ましく感じた。そういう彼らが情報交換の場として組織したのが「黒部の衆」であった。

彼らは、主要ルートの積雪期登攀が完了したのを期に、黒部別山、黒部丸山、剱大滝地域での自分たちの華々しい登攀記録を集録して２００５年春に「黒部別山―積雪期―」を出版された。その出版記念講演会が同年5月に北小松の県立比良センターで開かれ、住吉仙也、岡田博司両氏と共に私も招かれ、出席した。席上、まず驚かされ、さらに面映い思いをしたことは、彼らが、私どもの半世紀も前に展開した積雪期の黒部川をめぐる一連の山行について、それらが革新的な認識の下での先駆者的な活動で、新しい時代の礎を築いたと高く評価して敬意を表されたことであった。

実は、この記念講演会では、宍戸元氏が第一スピーカーとして講演されることになっていたが、急用のため欠席され、私が代役を務めることになった。50年もの昔を回想しつつ、いかにヒマラヤに憧れながらも黒部に強く魅かれ、その喜びを感じていたのか等を話した。

その本には、彼らの表現で言う「開拓期」の先人の一人として宍戸氏

が一文を寄せておられる。その中で宍戸氏は「山行の目標は理想であり、それは理屈ではないと私たちは考えていた」と述べておられる。

これをいかに解釈して話せばよいのか若干悩むところとなったが、それまでに登りつくされた感がないではなかった稜線を行く山行に比べ、はるかに強い未知の領域に踏み込んでゆくことに強い魅力を感じ、それが自然に仲間全員の夢となるほどに膨らんでいったのではないかと考えた。

その出版記念会の参会者は50人を超えていたが、第一級の登攀技術と経験をもつ現役登山家たちに囲まれて聞いた彼らの山行報告は、その一言一言が超人的な登攀を感じさせ、平素、中高年の山歩きの群れにまじって世話人の丁寧なご注意を聞きながら連なって歩いている私にとっては、浜に戻ってきた浦島太郎のような気分で、まさに驚きの連続であった。素晴らしい夢をグループとして共有しておられ、山行の成果のすべてがその実現に向けての懸命の努力の結果であると感じた。

共有できる夢をつかむことができず低迷を続ける私どもの場合と比較しつつ、強い羨望を感じ、また啓発された講演会であった。

（1957年工学部卒）

餅つきも登場
夏の白馬集会

本会の夏の恒例行事である白馬集会は05年8月27日から長野県白馬村八方の「ホテル対岳館」（丸山庄司館主）で開かれ、同伴家族を含め12人が参加した。

初日は夕食の後、別棟の「与兵衛倶楽部」で歓談。「黒部の衆」が昨春出版した記録集「黒部別山―積雪期」を宍戸元氏が持参したことから、年配のメンバーの間では、この本を囲んで半世紀前の黒部川横断当時の思い出話に花が咲いた。

2日目午前中は対岳館中庭で、季節外れの餅つき。かつて山に入る際、同館でついてもらった餅を保存食として携行した時代をしのんで館主夫妻が特別に催してくれた行事で、参加者は夫妻の息の合った技に拍手を送りながら「若手会員が子供連れで参加してくれたら喜ばれたのに」などと話し合っていた。午後は八方尾根散策など自由行動。

3日目は恒例の懇親ゴルフ大会が穂高町の穂高カントリークラブであった。

出席者は次のみなさん。（卒業年次順）

田島汎▽住吉仙也▽川島勇▽宍戸元▽三枝礼子▽木村裕一▽坪井和子▽兼清喜雄▽梶本孝治▽高田邦雄▽山田靖則

東京支部だより

徒歩で三浦半島縦断

4月8日、糸井、出雲路、前沢の諸兄を誘って三浦半島縦断約32キロを歩きました。地図に真南に線を引き、そこからなるべく離れずに、という趣向です。

京急南太田駅から佐島まで、かなり変化に富んでおり、幾つもの丘陵や山を越え、約700メートルの高低差がありました。朝8時出発で、夕方5時着でした。もちろん、ばてばてでした。

昔の人はよく歩きました。松尾芭蕉は、深川、千住を出て、春日部、間々田、鹿沼と毎日9里（36キロ）を歩き、鹿沼―日光6里は午前中に着いている。村尾嘉陵という19世紀はじめの人は、ウオーキングの元祖のような人で、麹町から府中、多摩川を、見物がてら日帰りで往復している。約64キロを15時間で歩いている。川路聖謨は、公用とはいえ、川崎下田間180キロを3日で歩いている。強い人がいたものです。この人たちはまあ歩くプロですが、一般の人も旅に出れば1日8里くらいは歩いたようです。

登山の場合、私たちはあまり距離ということを考えずに歩いていたように思いますが、時速は1～2キロ程度でしょう。ちなみに、槍ヶ岳―剱岳間は約60キロで、40時間程度の行程です。

そういうわけで「距離を歩こう」とOUMCの東京のメンバーに呼びかけたところ、上記3氏が参加し、去年1月の桜木町―江ノ島30キロ、今年3月の三浦半島偵察行に次いで今回が3回目でした。

街道筋を歩くのではないので、地図を読み、地形を見、天候に備える等の要素が入り、結構面白いものです。歴史や草木も入れば更に深入りできそうです。いつか、例えば紀州の熊野本宮大社から高野山までを山や村や渓谷を伝って歩くようなことを関西のメンバーと実現できれば、と思います。賛同願えればプランを作りましょう。

山岳部も「地球を歩く学校」として技術と好奇心を育む場を目指せば復活の可能性は大いにあると思います。今も、多くの熟年層は楽しげに野や山を歩いているのですから。

（横尾秀次郎）

三枝さんの偉業祝う
ネパール語辞典祝賀会

P29遠征隊員だった三枝礼子さん（薬30年卒）が取り組んできた「日本語ネパール語辞典」（大学書林刊）の完成を祝う有志の会が4月6日、大阪市西区の住友クラブであり、会員18人が三枝さんの長年の苦労をねぎらった。

三枝さんは1997年に「ネパール語辞典」を刊行しており、ネパール語→日本語、日本語→ネパール語の二つの辞典の編纂を一人でやり遂げた。この偉業は2月23日付の朝日新聞大阪版でも紹介された。

祝賀会では、出席者を代表して住吉仙也氏が「内容が難しくて我々には猫に小判だが、P29登頂以上の長い年月をかけた仕事で、三枝さんの忍耐力に驚いている。これからはゆっくり油絵を描いてください」と祝辞を述べた。

これに対して三枝さんは「英語―ネパール語の辞書は昔からあり、日常的なものは今さらつくっても仕方がないと考え、文化人類学者など研究者レベルに実用的なものをめざした。準備段階を含めると実質20年かかったが、出版社がよく出してくれたと思う」と話した。

「山研」へのお誘い

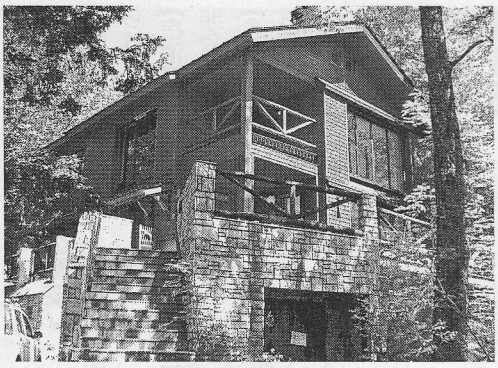
日本山岳会上高地山岳研究所 管理人 内野慎二

日本山岳会の上高地山岳研究所をご存知でしょうか。河童橋の近くにある山小屋ですが、なんと、昨春から、阪大卒業生が管理人を務めていることが分かり、寄稿をお願いしました。

◇

はじめまして。このような場を設けていただき、ありがとうございます。昨年夏、木村裕一さんが上高地の山岳研究所（以下、山研…さんけん）に立ち寄られたことが今回のきっかけとなりました。引き合わせてくれた山の神様に感謝しつつ、ペンをとりました。

まずは自己紹介です。私は阪大（平成6年経済学部卒）では、肩に銀杏のマークのあるユニフォームで軟式野球をしつつ、山好きな友人に誘われて登山を始めました。野球の合宿で痛めた肩を回しながら山に向かうこともあれば、縦走による筋肉痛の脚をだましだましノックを受けるという学生生活を送りました。その友人は藤井君といいますが、一時期、山岳部に在籍していました。私も何度か彼にくっついて部室にお邪魔しました。そういえば、仁川での岩登りの練習に連れて行ってもらったこともありました。あの垂直（に見えた）の岩壁と、それをすいすい登る部員の皆さんの姿は衝撃的でした。あの時引っぱり上げてくださった蔭山さん、杤尾さん、部員の皆さん、ありがとうございました。そして、入部しなくてすみませんでした。卒業後30歳まで会社に勤め、その後、南アルプスの百間洞、赤石小屋、鹿島槍の冷池山荘などで山小屋修業をしました。ちなみに藤井君は現在、夫婦で百間洞山ノ家の管理人をつとめています。私の妻かおりは山小屋稼業の先輩であります。20世紀の終わりの数年間、八ヶ岳の赤岳鉱泉、行者小屋にて四季を通じて登山者をお迎えしていました。ですから、皆さんの中には既にお会いしている方もいらっしゃるかもしれませんね。東京学芸大のワンゲル出身です。このような私たちが昨年より、今年2歳になる娘を連れて山研の管理人をさせていただいています。



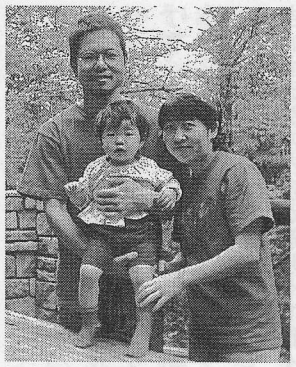
森の中に立つ「山研」

それでは、山研についてご紹介します。山研は、河童橋を岳沢側に渡って3、4分歩いた森の中にあります。ウッディーな外観で、研究所というより別荘のような建物です。裏手にはミニ水力発電実験の小屋もあります。河童橋からほんの少し離れているだけですが、あの喧騒が想像できないほど静かです。騒々しいのは時折来るサルの群れ。周囲の木や草にエサを求めてやって来るのですが、中にはテラスの手すりの上を堂々と渡っていくやつもいます。

山研に宿泊される方は日本山岳会の会員とその同行者ということになっていますが、個人山行の登山者から、ご夫婦で上高地を散策される方、

同好会など大人数での集まりの皆さんまでさまざまです。基本的には自炊になっていますが、素泊まりのようなシンプルな食事の方から、肉、野菜、酒をたっぷり担ぎ込んでの大宴会まで、これまたさまざまです。ありがたいことに、おいしいお酒を味見（？）させていただくことも何度かありました。

ところで、1シーズンお客さんと接しての印象ですが、最初はちょっと敷居が高いけど、使ってみたらなかなかいいじゃないかと、何度も利用される方が案外多いように思います。実際のところ、貸し切り状態の日も結構ありますので、それも1つのポイントでしょうね。皆さんそれぞれのスタイルで上手に利用されていて山小屋とは違った広がりを感じました。


内野さん一家

さて、春から秋まで6ヶ月あまりを上高地で過ごしたわけで、山小屋バイトのときより長期間、山にいたことになります。家族も一緒ゆえ、「山で暮らした」という実感がありました。さまざまな季節の表情を見ましたが、特に印象に残ったのは、梅雨頃のカラマツの新緑と秋のカツラの甘い香りでした。マツの葉というと、緑濃く硬くて尖った強いイメージしかなかったのですが、新緑の頃は赤ん坊の産毛のように柔らかそうな若葉で、鮮やかな黄緑色をしていて、とても新鮮に映りました。

「カツラはメープルシロップのような甘い香りがする」とは前の年に聞いていたのですが、何のことだかさっぱり分かりませんでした。だいたいメープルシロップと言われても、普段食べないから知りません。秋になって「明神と徳沢の間の右岸でよく香っていたよ」とお客さんに聞いたので、今年こそ自分自身で匂いを知りたい、探さねばと思っていました。ある日、岳沢の登山道の入り口あたりを散歩していたら、強烈に甘い匂いがしました。気付けば丸いカツラの落ち葉が道の上に重なっています。見上げると全身まっ黄色のカツラの大木。ようやく実感できて、とても嬉しかったです。

山研は皆さんの工夫次第で利用価値もふくらみます。私たちも微力ながらお手伝いさせていただいています。どうぞ上高地へお越しください。色々な山の話などをお聞きできることを楽しみにお待ちしています。

＜上高地山岳研究所の概要＞

【開所期間】ゴールデンウイーク頃から11月初め頃まで

【宿泊料金】1泊＝会員3、100円、非会員（同行者）5、100円

【食事】基本的に自炊。キッチンに鍋や食器、調味料など揃っています。希望者にはご飯と味噌汁を1食350円で提供

【客室】和室2部屋（10畳と8畳）、布団あり。相部屋になることもあります。風呂あり

【要予約】現地電話にて受け付け

TEL　0263・95・2533

FAX　0263・95・2635

その他詳細は日本山岳会ホームページ、または会員名簿をご覧ください。

URL：http://www.jac.or.jp/（山研運営委員会のページへ）

大阪大学山岳部活動報告

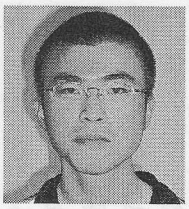
2005年度

リーダー所感

網野　善久

2005年3月の春山合宿は現役部員が1人だけということで、OBにお手伝いいただいて、ようやく実行することができた。明神岳東稜から明神岳を往復した。技術・体力的に自分に合った山行であったと思う。帰宅後、それまでの山行で覚えたことのない疲労感を感じた。それだけ充実した山行であったということであろう。登ることにのみ集中させてくださったOBの配慮に感謝します。

2005年度は新入部員1人、現役部員2人でのスタートであった。時代の流れなのか、どこの大学山岳部も存続が危ぶまれる状況である。山岳部の今後の活動の方向性を再考せねばならないだろう。重いザックを背負い、悪天候に悩まされ、一歩間違えるとどうなるかわからない、という緊張感の中で何日も歩き続ける、ということに魅力を感じる人が我々の世代で非常に少ないのが現状であろう。これでは雪山やアルパインクライミングを看板に勧誘したところで部員獲得は難しい。かといって、これらを捨ててしまっては山岳部の意



義・魅力を伝えていくことができなくなってしまう。

そんなジレンマを抱きながらの1年となった。実際の活動は、夏は山へ行き、冬はフリークライミングをする、というものになった。自分自身の力量不足と、現役部員も例外ではない時代の流れの中で自然とこのような結果になったと思う。これが一つの方向性を示しているのでは、と勝手ながら僕は思っている。

現役部員の少なさから、OBの皆様に大変ご心配をおかけしました。一緒に山に行ってくださった方々、たびたび手伝っていただいてありがとうございました。そして、1年生、中途半端なリーダーについてきてくれてありがとう。今後も山岳部は氷河期が続くでしょうし、山岳部らしからぬ合宿を我々はしばしば行うかもしれません。山岳部の方向性を試行錯誤していると思って、今後も温かく見守ってください。よろしくお願いします。

◆春山合宿／明神岳東稜

［期間］3月19日～21日

［メンバー］網野善久（3年）、越智栄次郎（OB）

19日（晴）釜トンネル（6・30）―上高地（8・30）―明神宿（9・45）―宮川コル（11・00）―ひょうたん池のコル（13・30）

上高地ですら周囲にはトレッカー、ハイカーのみ。クライマーらしき人はいなかった。案の定、明神宿以後はトレースがなく、2人で膝までのラッセル。天気がよいのと急勾配で高度が稼げるのとで非常に気持ちよかった。宮川のコルを過ぎたところでⅣ峰あたりから雪崩るのを目撃。小規模なもので、上部のみが崩れていた。

20日（晴のち雪）BC出発（5・30）―明神岳（12・00）―BC（15・00）

トレースが全くないため、明神岳アタックのみとなった。雪稜の快適な登高。核心部のバットレスまでノーザイルで登る。バットレスはザイル使用で2ピッチ。下部の雪壁は越智OB、上部の一枚岩フェースは網野がそれぞれリード。上部フェースはルート図通りランナーはたくさんあるのだが、全体的に雪がかぶっており、凹角のクラックには氷が張り付き、網野の技量ではFIXロープがなければ登れない。核心部を抜け、しばらく登るとピークへ到着。前穂の眺めが抜群であった。風が強かったため、越智OBはピークを踏むと早くもクライムダウンを開始。網野はしばらく休憩後、不器用なクライムダウンを開始。核心部、第一階段は懸垂下降。第一階段の上部あたりから天気が崩れ始めるが、雪が本降りになる前にBC着。非常に充実した一日であった。感謝を込めて握手を交わす。

21日（晴）出発（6・00）―釜トンネル（10・30）

前夜の降雪でテントが20～30㌢埋まった。雪崩が心配だったが、何事もなく下山。

◆新歓合宿／剱沢

［期間］5月2日～5日

［メンバー］網野善久（3年、CL）、三十尾誠（1年）、藤井信行（4年）

2日（ガスのち晴）室堂（9・00）―別山乗越（12・15）―剱沢（13・00）

室堂を出た時はガスっていたが、別山乗越に到着する前にはきれいに晴れた。雪の量は前年とあまり変わらないように思えた。剱沢まで入る登山者は少なく感じた。雷鳥沢から別山乗越への登りで三十尾がグロッキーに。急性高山病か、体力の問題か。その日は体調不良を訴えていた。とりあえず様子をみることにした。

3日（快晴）剱沢（6・15）―奥大日岳（9・30）―別山乗越（12・45）―雪上訓練

雲ひとつない快晴。紫外線が顔に痛い。三十尾の体調も回復したようなので遠足に。トレースばっちりで問題がなさ過ぎる。途中、打ち捨てられたテントとザックがあった。遭難跡のようであった。帰り道に、雪庇の崩壊を見た。その後、剱御前小屋方向の斜面で雪上訓練。滑落停止とキックステップをやる。雪が腐っていて滑落停止は練習にならなかった。キックステップにしても同様で、形だけとなった。

新歓合宿　別山乗越への登り

4日（晴、風強し）剱沢（5・15）―大汝山（8・45）―雄山（9・15）―別山乗越

（12・30）―帰幕（13・00）

剱沢から別山へ直接上がる。アイゼンを着けていたので三十尾もしっかりついて来た。稜線上は風が強かったので、様子を見ながら進む。が、三十尾も「度胸いりますね」とか言いながら、特に危なげなくついて来ていたので、そのまま雄山へ。立山三山の主稜線に上がるころには風も弱まってくれた。

5日（曇）剱沢（6・15）―室堂（9・00）

◆夏山縦走合宿／穂高～槍ケ岳～表銀座

［期間］8／15～20

［メンバー］網野善久（3年、CL）、三十尾誠（1年）

15日（ガス・雨）上高地（6・15）―岳沢ヒュッテ（8・50）―前穂（12・30）―紀美子平（12・55）―奥穂（15・15）―穂高岳山荘（15・50）

稜線上はガスと雨。予想通り初日はコースタイムをオーバーした。天候のせいか、稜線上には人があまりいなかった。

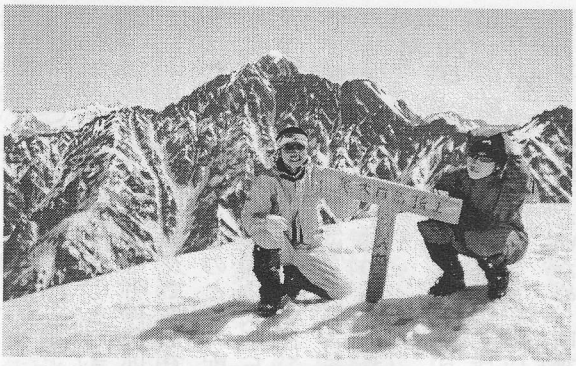
16日（晴）穂高岳山荘（4・30）―涸沢岳（4・50）―北穂（8・20）―大切戸A沢のコル（10・20）―南岳山荘（12・30）

今回の縦走の核心部。穂高岳山荘から南岳山荘まで5～6時間のコースタイムだが、8時間かかった。槍岳山荘まで行く予定であったが、2人とも核心部を終えて集中力、体力ともに使い果たしていたので、これで行動終了にした。

17日（晴）南岳山荘（5・30）―中岳（6・30）―槍ケ岳（8・00）―槍岳山荘（8・40）―西岳山荘（11・45）

特に問題はなかったが、早めに行動終了。

18日（ガス・晴）西岳山荘（4・30）―大天荘（7・00）―燕岳（9・50）―燕岳山荘（10・10）―大天荘（12・00）―大天井岳（12・30）―大天荘（12・45）―常念小屋（15・00）



新歓合宿　奥大日岳頂上で

大天荘に荷物をデポして燕岳往復にでかけた。荷物が軽くなったためジョギングのような足どり。おかげで2日前の遅れを取り戻すことができた。しかし、しんどかった。

19日（晴・曇）常念小屋（4・30）―常念岳（5・30）―蝶ケ岳ヒュッテ（8・45）―大滝山（10・20）―槍見台（12・45）―徳本峠（15・20）

蝶ケ岳まではハイキングコースだった。そこからいつまでも続く樹林帯が待っていた。これにはさすがに閉口した。そんな疲れを徳本小屋の親父さんが吹き飛ばしてくれた。この親父さんはしきりに水を山荘から買うことを勧めてきた。水場は歩いて15分くらいのところにあるので断ったところ、なお強引に勧めてきたが、やはり断った。「疲れてっだろうから買ってけ」「いやですわ。ただで手に入るのに」というやりとりをしばらく続けて、お互い大笑いした。水はもちろん水場へ。その後、小屋に水を買いに行った他のパーティーが親父さんに叱られていた。この日は下山前日ということで食料大解放。水場に行っておいてよかった。

20日（晴・ガス・雨）徳本小屋（4・10）―霞沢岳（7・15）―徳本小屋（10・15～11・00）―明神（12・30）

テントなどは徳本小屋にデポして霞沢岳へ。途中、1パーティーだけすれ違った。徳本小屋でコーヒーを飲んでからのんびり下山。

◆錫杖岳アルパインクライミング

［期間］9／9～10

［メンバー］網野善久（3年、CL）、三十尾誠（1年）

9日（晴）中尾温泉口（8・30）―テント場（10・15～45）―左方カンテ登攀開始（11・50）―登攀終了（15・30）―懸垂終了（16・40）―テント場（18・00）

奥飛騨温泉駅からタクシーで登山口へ。運転手が前年と同じおじちゃんで、「帰りも送ってやる」と言われていたのに、バスで帰ってしまった。おじちゃんはそれを覚えていて、若干ご機嫌斜めであった。

1P　Ⅲ級　草付の凹角。むしろ、いやらしい。

2P　Ⅳ級　小テラスまで。

3P　Ⅳ＋級　前半の核心。

4P　Ⅳ級　チムニー。苦手、かつザックが引っかかって、不愉快かつしんどかった。

5P　Ⅳ＋級　しっかりしたフェース。こういうのが好きだ。

6P　Ⅴ＋級　ルートの核心。出だしがわからなかったのでスリングをつかんで登った。下降は隣の「注

文の多い料理店」を懸垂下降。

10日（曇）テント場（6・00）―1ルンゼ取り付き（6・35）―3ルンゼ取り付き（9・15）―3ルンゼ登攀開始（9・30）―登攀終了（12・30）―取り付き（14・00）―テント場（15・15）―登山口（16・15）

1時間寝坊。おまけに、間違えて1ルンゼを登ってしまった。2ピッチ目で間違いに気付き、取り付きまで懸垂下降して3ルンゼへ移動。

1P　Ⅳ－級　濡れていた。

2P　Ⅳ－級　ルート図の3Pまで調子に乗って登った。

3P　Ⅲ＋級　チョックストーンをくぐるように登る。こんなルートは初めて。実にユニーク。

4P　V＋級　ルート図では人工だが、フリーで。爆笑しながら登ったら笑い声がルンゼにこだました。

5P　A1級　コースを読み間違え、難しいほうに突入してしまった。そのせいで鐙を出した。

思ったより寒かった。冬季で営業終了の小屋の陰にテントを張った。夜になると雪が降りだした。

4日（晴）夏沢荘（5・20）―硫黄岳（6・15）―硫黄岳山荘（6・45）―横岳（7・15）―赤岳展望荘（9・30）―赤岳（10・15）―行者小屋（11・40）―美濃戸口（14・20）

前夜の雪でうっすら雪化粧。気持ちのよい晴天で快適な行程となった。行者小屋以後、おじいちゃんと一緒に来ていた5歳の男の子と戯れながら美濃戸山荘まで。

◆春山偵察合宿／八ケ岳

［期間］11／3～4

［メンバー］網野善久（3年、CL）、三十尾誠（1年）

3日（曇のち雪）小淵沢駅（6・12）―登山口（10・30）―しらびそ小屋（12・15）―本沢温泉（13・30）―夏沢荘（15・00）

◆伊豆城ケ崎フリークライミング

［期間］12／27～30

［メンバー］網野善久（3年、CL）、三十尾誠（1年）、越智栄次郎（OB）

4日間登り続けて大変な筋肉痛に襲われた。

会員の近況

（白馬集会と新年会の出欠はがきなどから抜粋しました。その後の変動などは未確認。卒業年次順。敬称略）

堺谷　弘（理28）「白樺クラブ」という山の会に入って月1、2回の山行を楽しんでいます。冬はスキー、夏は比良、鈴鹿の沢登りをやっています。消防設備士甲種の資格取得を目指して受験勉強中です。コンピューター作曲にも取り組んでいます。

川島　勇（工29）ウオーキング、読書、囲碁、肝ゾー検査を続けています。手術後2年経ち、ゴルフの練習も再開しました。

二木　節夫（工29）去年春ごろから腰と膝が悪く、医者からゴルフ、登山ともやめるように言われ、全くつまらない年でした。痛みは去りましたが、今でもしびれが残っていて甚だ不愉快です。原因ははっきりしませんが、老化によるものであることは明らかです。まあ、もう少し様子を見ようかと思っています。

三枝　礼子（薬30）OUMC50周年記念誌を拝読いたしまして「私の山の記憶は自分で思っている以上に昔のことなのだ」と思い知りました。

濱　一枝（薬30）元気で、点訳ボランティアを続け、コーラスとピアノを楽しむ日々でございます。

高木　俊夫（理31）まだ元気に暮らしております。昨年5月から6月にまたがる天候に恵まれた1週間、乗鞍の平湯に止宿。40年ぶりに上高地を訪れ、また乗鞍の山頂から北アルプスの全貌を眺めてきました。上高地は変わっていないところが多かったのですが、蒲田川上流部の変貌、観光地化には驚かされました。

横井　保枝（文31）1月末から最初で最後？のヨーロッパスキーに行きます。滑るというよりも雪山を眺めるだけになるかもしれません。

宍戸　元（医32）現役時代に撮影した山の写真のネガの整理を今年こそやろうと思います。

石澤　命久（歯32）昨年10月、酒の飲み過ぎで転倒。第12胸椎が変形し、現在も腰痛に悩んでおりますが、スキーは何とか出来ました。

岡田　博司（法33）アイスランドへ行ってきました。まだまだ元気で自然の中を歩き続けたいものです。

四方　大中（法33）3月にリタイアしました。いろんな趣味を楽しむことができ、ボランティア活動にも参加しています。

坪井　和子（薬33）山心は20代の頃と変わってないつもりですが、足のほうが……。今年から低い山に登りたいと思っています。一昨年、尾瀬を縦走して最後に至仏山を登ろうとしたら、ちょっと足を踏み入れただけでギブアップ。

山本　信樹（工35）百名山は今年は上越国境沿いの山にチャレンジ中です。今年中に残りを片手まで進めたいと思います。

野田憲一郎（経35）①1月に通訳ガイド（英語）の国家資格を取得。楽しみながら年金の足しにしたいところです②山の環境保護団体HAT-Jの理事として8月に富士周辺に世界の高校生を集め、環境を勉強する合宿を開きました③5月連休には前沢、米沢、横尾、出雲路君と仙丈岳へ行ってきました。

村井　忠雄（工36）昨年8月より8ヶ所、延べ20日間のスキー行で運動に自信ができ、今夏には山行へと体育館に通いましたが、背筋運動で脊柱を傷めてしまいました。早く回復して諸兄と山行ができるよう努力致します。

金子　忠男（工37）趣味の木工、地区の自治会長、市民農園を借りての野菜作り、同好会のテニスと、忙しくしています。昨年5月には久しぶりに高尾山を歩いてきました。

前澤　祐一（工37）昨年は4月に谷川岳、5月上旬に仙丈岳、12月末に日光白根山と、かなり頑張ってしまいました。いずれもOUMCの仲間と一緒で、こうして山行が楽しめるのも会あってのことと、いまさらながらありがたく思う次第です。

土居　泰子（薬37）山行には自信をなくしてしまっています。代わりに古代エジプト語（ヒエログリフ）に興味を持って10数年来、学んでいます。本年3月、「古代エジプト愛の歌」を㈱弥呂久より出版しました。ヒエログリフから直接邦訳した53篇の詩（歌）です。3500年前の詩が今に通じるのは大きな発見です。

大角美佐子（薬37）一昨年2月末に特許事務所を定年退職し、直後に母を亡くしました。退職したら始めたいと思っていたことに次々に手をつけ、忙しい年金生活を過ごしています。生来の貧乏性のなせるところだと思っています。ハイキングもスキーもしなくなって随分たってしまいました。阪神大震災で全壊した家の再建に当たり助けていただいたことに感謝しています。

梶本　孝治（工38）頭のほうは年相応にボケが来ておりますが、その分、長年培った老人の悪知恵と口の悪さで仕事に励んでいます。税金の払い方が足りないのか、いまだ現役です。足腰はだいぶくたびれてきましたが、週末、お天気が良いと六甲はよく歩いています。今冬は六甲も雪が多く、暮れには雪の六甲を楽しみました。

三澤日出夫（工38）オホーツクの流氷を見たり、白神山地の近くを見たり。4～5日の旅行はカミさんを付き添いに出かけています。

宇野　雅明（医39）昨年夏、スイスアルプスのトレッキングをしてきました。さすがに、よく整備されていて、気持ちよく歩けました。

播本　裕晃（法40）近所の同年輩の方たちと近郊ハイキングを月1回楽しんでいます。体力を回復させて再び北アルプスにでも出かけたいと思っています。

黒田　治朗（医44）65歳まで現役勤務医として頑張ろうと考えています。このため、忍び寄る老化に打ち克たんと、出来るだけ車、エレベーターを使用せず歩行することを心がけています。

岡田　謙治（法44）冬は極力、仕事を減らし、月のうち10日はスキーに出かけています。

後藤　正教（法54）田舎暮らしをエンジョイしており、鶏を飼い始めました。1羽1500円で10羽購入し、5月30日に初卵が誕生しました。小屋の柱は、知人の山に入り、ヒノキを15本切り出した、すべて手作りの6畳大です。炭焼きとイノシシ撃ちを今後の課題にしています。山登りは、右足首の神経痛によりハードなものは厳しくなっております。

榊原　淳（工58）サンゲマルマールの写真のデジタル化を進めています。夏にはダウンロードサイトをオープンする予定です。

奥山　宏臣（医59）昨年は秋に大峰山に行きました。今年は沢登りにと、夏に向けて減量中です。

畑　秀信（人間科学59）ゴールデンウイークに剱北方稜線と剱尾根に行ってきました。剱尾根は23年ぶりでしたが、実に新鮮な気持ちで登ることができました。昨年に引き続き、剱を堪能できました。何度行っても良い山です。

藤田　繁雄（医・平成3）西区の日生病院外科に勤務して間もなく3年になります。今年は人事異動で南紀に移ることになりそうです。

河野　美樹（医・平成17）現在、吹田市民病院で研修医をしております。最近、パラグライダーも始め、週末に空を飛んだりしています。遊び癖はなかなか抜けないようです。

渡辺　景子（基礎工・平成17）基礎工学研究科（大学院）に在学中です。女子部員が私を最後に途絶えてしまい、残念です。

編集後記

今号は、阪大卒業生で日本山岳会上高地山岳研究所の管理人をしている内野氏の特別寄稿を掲載しました。静かな季節に訪ねてみるのも一興です。毎号、原稿不足に悩んでいます。会員諸氏の投稿を待ちます。随想、山行報告、紀行など何でも歓迎します。

（会報担当・高田邦雄）